旭川医大 疾院二3-2

http://www.asahikawa-med.ac.jp/



編集 旭川医科大学病院 広報誌編集委員会委員長 廣川博之

2020東京オリンピック <u>バレーボール女子日本代表のチームドクターを経験して</u>

旭川医科大学 副学長付 整形外科学講座兼務 助教 小原 和宏

2017年に中田監督が就任されてから大きな国際大会 に帯同をしてきました。一年延期となった東京オリン ピックにも帯同することになりました。オリンピック への帯同は初めてです。オリンピックの選手村には選 手とスタッフ全員が宿泊すると思っている人々が多い と思いますが、選手村の宿泊には人数制限がありま す。過去のオリンピックのバレーボール競技におい て、チームドクターは選手村の外(村外)のホテルに 宿泊し、日中は「デイパス」というカードを使用して 選手村に入り選手たちの診察をしていました。試合会 場は「観戦チケット」をバレーボール協会が用意し観 客席から選手たちを見守り必要に応じて選手の診察を 行っていました。しかし今回はコロナ禍における「バ ブル方式」による開催となったため「デイパス」は発 行されず医師でも例外なく村外スタッフの選手村への 出入りは不可能となりました。オリンピック開催中、 東京都は緊急事態宣言下になり無観客試合となりまし た。それに伴い、チームドクターも同様に村外スタッ フの試合会場への入場は不可能となりました。私が選 手の診察をできる場所は、バブル内に設置されたホテ ルの一室と練習会場のみでした。対ケニア戦(初戦) はホテルで観戦しました。難なく2セットを連取しま したが、3セット目に相手の選手の足の上に日本チー ムの主力選手が着地してしまい、右足首を捻挫してし まいました。会場に入れなかった私は「長年診察して

きた選手の一番つらい時に診察してあげることが出来 ない」と悔しい思いをしました。都内の救急病院受診 となり、私もそこへ合流しました。救急病院の医師は 私に診察を一任してくださいました。涙が出るほどう れしかったのを覚えています。多くのスタッフが「大 会期間中の復帰は難しい」と感じている中、診察後、 私が監督に「うまくいけば7~10日後には復帰でき る」と報告したときに監督が驚いていたのを覚えてい ます。この選手は前回のリオオリンピックの代表選手 に選ばれず非常に悔しい思いをしていました。その後 努力を重ね今年は絶好調をキープしていました。そん な中でのケガでしたので、私はできる限りのサポート をしたいと思いました。私と選手の間では「必ず復帰 できる」と信じて疑いませんでした。そして6日後に 完全復帰することが出来ました。その試合も私はホテ ルで観戦となりましたが、私はまるで彼女の親の様に 心配し、素晴らしいスパイクを決める度に涙を流し感 動していました。最終的には予選敗退という結果にな りましたが、最後まで選手とスタッフをサポートする 仕事が出来たことに誇りを感じています。旭川医科大 学の多くの方々のご支援のおかげです。ありがとうご ざいました。この様な恵まれた経験を地域の皆様に還 元していきたいと思っております。今後ともどうかよ ろしくお願いいたします。



最後列右端が筆者

東京オリンピック・パラリンピック(札幌会場)への医療救護派遣活動

救急医学講座 岡田 基

札幌市保健福祉局より、「東京オリンピック・パラリンピック競技大会札幌開催に係る救護所への従事者派遣要請」に基づき、当院より、DMATメンバーである業務調整員として医療材料係の森内さん、9E看護師の高橋さん、岡田の3名で救護所活動を行うこととなりました。本派遣は、大会本部からの依頼ではないため、選手や役員を対象としたものではなく、観客や周囲の疾病・傷害発生時の救護要員として派遣されたものでした。

我々の担当日である8月8日は男子マラソンの開催日でした。新型コロナウイルス感染症のため、公式には無観客開催ですが、大勢の観客が押し寄せることが予想されていました。

当日は札幌市保健所に早朝5時45分集合のため、札幌駅周辺のホテルに宿泊しましたが、交通規制のため移動に苦労しました。保健所には道内各地から集合した医療救護班が6

チームほど集まっていました。通信手段やトラブル時の対処方法などのレクチャを受け、各救護所へタクシーで移動しました。

我々の活動場所は、北海道大学の敷地内のコース沿いにある救護所でした(写真1)。救護所内には簡易ベッドが2台設置され、点滴処置

なうし前近いのす策みいを利あどにた日くて飲るをま、含用りがな(ま真お料な施し付めすまでっ写で夏り水ど施た近救るせきて真2日、を暑しがの護こんるい2週が大用さて、観所とでよま)。間続量意対臨幸客をはし



写真1



写真2

た。この場所は、マラソンコースの20Km、30Km、40Kmの通過地点であり、また、選手用の給水所の近くでもあり、よいロケーションでした(写真3)。仕事がなかった我々は、大追選手をはじめ、日本代表選手のみならず、参加選手に声援を送って、つかの間のオリンピック観戦を楽し

んでいました(写真4)。



写真3



写真4

東京オリンピック・パラリンピックの派遣報告

リハビリテーション部 佐藤 弘也

今年の夏、東京オリンピック・パラリンピック会場の医療スタッフ(理学療法士)として参加してきました。オリンピックは8月4日から6日の札幌競歩・マラソン競技会場に田中、美馬、私の3名が参加し、パラリンピックは8月20日から30日の東京の車いすラグビー競技会場に塚田、田中、私の3名が参加しました。

大会直前までコロナの感染状況により大会が中止になる可能性がありました。感染拡大防止による対面研修による事前準備は全て中止。全てオンライン研修となり、事前に動画視聴を行いました。ここでは医療救護、感染対策はもちろん、災害医療やテロ対策など大きな大会ならではの学びもありました。大会1ヶ月前ごろからは、各会場毎にライブで研修会があり、競技特性によるスポーツ傷害や語学学習も含まれており、いよいよ本

番が近づいてきたように感じました。

大会当日、競歩・マラソン競技は 気温35度前後の暑さの中行われました。熱中症対策が主であり、いち早 く選手の不調を察知する必要がありま した。生命の危機に瀕し、救急搬送 された選手もおり、選手をどの手段、 どのルートで搬送するのか、各スタッ フ間でコミュニケーションをとり、連携 を図ることが重要でした。競歩競技 では選手が試合中にCOVID-19陽性 者の濃厚接触者であることが発覚し、 十分な感染対策で取り組みました。

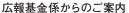
車いすラグビー競技は、車いす競技の中で唯一タックルが認められており、起こりうるアクシデントを想定して望みました。大会期間中は情報共有を綿密に行い、各シフトで同様の対応ができるように限られた時間での対策を行いました。幸いなことに大きな

怪我や事故はなく、医療チームとして、 各部署のスタッフとの連携が重要であることを再確認できました。

今回学んだ知識や事前準備の大切さ、 リスク管理、コミュニケーション、連携な どの経験は、臨床でも多く活かせると思 います。院内においても今後はより一層コ ミュニケーションをとり、チーム内や他部 門と連携を図っていきたいと思います。

今後もリハビリテーション部は、様々なスポーツ活動のサポートを続けていきます。個人としては2026年パリパラリンピックにトレーナーとして出場できるように選手をサポートしていきたいと思っています。

最後になりましたが、多くのサポートを 頂いたスポーツ医科学研究委員会、リ ハビリテーション科・部、大学・病院関 係スタッフの皆様に感謝申し上げます。



東京2020オリンピック・パラリンピックにメディカルスタッフとして当院の医師・理学療法士が参加しました。

参加レポートを大学ホームページに掲載しておりますので、どうぞご覧ください。 URI:

https://www.asahikawa-med.ac.jp/index.php?f=hospital+topics+tokyo2020







看護師特定行為研修の開始について

看護師特定行為管理委員会 井戸川 みどり

本院は、本年8月17日に看護師による特定行為指定研修機関として厚生労働大臣から指定を受け、10月1日から特定行為研修を開始しました。今年度は、集中ケア認定看護師1名が受講しています。

特定行為研修は、看護師が、医師又は歯科医師の指示の下、手順書により特定行為を行う場合に特に必要とされる実践的な理解力、思考力及び判断力並びに高度かつ専門的な知識及び技能の向上を図るための研修です。本院は、北海道内において北海道大学病院に続き2番目となる、「外科術後病棟管理領域パッケージ」の指定機関として研修を行います。

外科術後病棟管理領域を選択した理由は、本院は道北・道東地域の基幹病院として高度な医療を提供する特定機能病院であること、手術目的で入院する患者が多い一方、在院日数が短縮する中、退院後の生活を見据えスムーズに地域医療へつなぐことが求められていることから「外科術後病棟管理領域パッケージ」を選択しました。特定行為をタイムリーかつ適切に実施することにより、術後の異常の早期発見、合併症の防止、さらに医療と看護、生活の視点を急性期から持ち関わることで、地域・在宅医療へスムーズに移行できると考えます。

特定行為研修は、病態生理学、臨床推論、フィジカルアセスメントなど全ての特定行為区分に共通する「共通科目」と各特定行為に必要とされる能力を身につけるための「区分別科目」に分かれており、講義、演習、実習、試験によって行います。本院は、働きながら研修を受講で

きるようカリキュラムを作成し、e-ラーニングを活用しなが ら共通科目、区分別科目を各半年、計1年間で学びます。

本院の研修の魅力は、内科、外科、耳鼻咽喉科・頭 頚部外科、皮膚科、麻酔科蘇生科、救急科、医療安全 管理部など幅広い診療科(部)の医師、経験豊富な薬 剤師とすでに特定行為研修を修了し本院で活動する看 護師が研修の指導を行うことです。多職種が協力し、病 院として特定行為研修事業を実施しています。

開講から2か月が過ぎ、現在、研修は共通科目の2科目が修了したところです。研修生は、e-ラーニングや演習、実習などに追われていますが、指導医のわかりやすい説明や研修生の疑問に丁寧に対応していただき学びの多い充実した研修になっています。

本院ではすでに特定行為研修を修了した3名の看護師が活動しています。手順書に基づきタイムリーに必要な医療ケアを患者へ提供し、医療チームの要として活動することは、看護の質の向上と看護師のやりがいにつながっています。また、多職種からもその活動に大きな期待が寄せられています。今後、本指定研修機関からも多くの優れた特定行為研修修了者を輩出すること、また、地域の看護職の受講も視野に入れています。高度急性期から在宅医療を支える人材を育成することは、地域の医療・看護への貢献と現在、大きな問題となっている医師の働き方改革の一助につながると考えます。今後も多くの診療科の医師や多職種のみなさまのご協力を得ながら進めていくことになりますので、どうぞよろしくお願いいたします。

外科術後病棟管理領域パッケージ

特定行為区分	特定行為								
呼吸器(気道確保に係るもの)関連	経口用気管チューブ又は経鼻用気管チューブ の位置の調整								
呼吸器(人工呼吸療法に係るもの)関連	侵襲的陽圧換気の設定の変更								
呼吸器(人工呼吸療法に係るもの)関連	非侵襲的陽圧換気の設定の変更								
呼吸器(長期呼吸療法に係るもの)関連	気管カニューレの交換								
胸腔ドレーン管理関連	低圧胸腔内持続吸引器の吸引圧の設定及びそ の変更								
	胸腔ドレーンの抜去								
腹腔ドレーン管理関連	腹腔ドレーンの抜去(腹腔内に留置された穿 刺針の抜針を含む)								
栄養に係るカテーテル管理(中心静脈カ テーテル管理)関連	中心静脈カテーテルの抜去								
栄養に係るカテーテル管理(末梢留置型 中心静脈注射用カテーテル管理)関連	末梢留置型中心静脈注射用カテーテルの挿入								
創部ドレーン管理関連	創部ドレーンの抜去								
動脈血液ガス分析関連	直接動脈穿刺法による採血								
栄養及び水分管理に係る薬剤投与関連	持続点滴中の高カロリー輸液の投与量の調整								
術後疼痛管理関連	硬膜外力テーテルによる鎮痛剤の投与及び投 与量の調整								
	持続点滴中のカテコラミンの投与量の調整								
循環動態に係る薬剤投与関連	持続点滴中の糖質輸液又は電解質輸液の投与 量の調整								





地域・施設を越えて学び合う「実習指導者研修」

看護職キャリア支援センター
教育プログラム開発部門

看護職キャリア支援センター教育プログラム開発部門では、令和2年度から「実習指導者研修」を開催しています。この研修は、令和元年度に実施した「看護職の実習指導に関する研修企画調査」の結果に基づき企画し、本院と地域の看護職の「看護学生の看護実践を指導する能力を高める」ことを目的としています。研修は、看護基礎教育における実習の意義、学生の理解と指導者の役割などの知識・技術を学ぶ基礎コース3回と、臨床実習指導者のシャドウイングを行い、学生指導の実際を学ぶ実践コース1回から構成されています。

昨年度はCOVID-19感染拡大の影響から本院の看護職のみで開催しましたが、今年度は、基礎コースにZoomで院外から参加いただいています。基礎コースは本院から延べ58名、院外から延べ69名、実践コースは本院から

7名の参加がありました。

参加者からは、「地方からも気軽に参加できる」、「実習先の理念や目標を理解し、学生の立場を考えることが必要」、「看護の素晴らしさを伝えられる指導者になりたい」など、地域、施設を越え学生指導について学び、高め合うことができました。





講義からの学びを院外参加者とZoomを通じ共有しました。

「看護職キャリアデザインセミナー」を開催しました

看護職キャリア支援センター キャリア支援部門

9月14日、看護職キャリアデザインセミナーを開催しました。講師は昨年の好評を受け、今年もLiezoカウンセリング&コンサルティングの中川貴美子先生にお引き受け頂きました。講演のテーマは、「コロナ禍を経て自己を見つめ直すキャリアデザイン〜ピンチをチャンスに!〜」でした。講演を聴かせて頂き、タイトルの通り、自己を見つめ直す機会になりました。そして、「今の自分でもよいのかな」という気持ちになれ、コロナ禍でうつむき加減だった顔と心は少し上がったような気がしております。今回のセミナーには看護学生や看護部看護師、看護学科教員、そして、他施設からの参加もあり、

講演時間や講演内 容について頂けたま 満足して頂けた後 です。受講は「しま 安が少し軽減ししま 職に向け前向きに



考えることができた」「頭で考えるだけでなく先ずは行動してみようと思った」「自分の人生は自分で作る、を実践していきたい」というコメントがありました。中川貴美子先生、貴重なお話をありがとうございました。

「外国人患者対応能力向上に向けた講演会」を開催しました 看護職キャリア支援センター 教育プログラム開発部門

2021年9月6日、「外国人患者対応能力向上に向けた講演会」を開催しました。本学看護職キャリア支援センター教育プログラム開発部門では、多様な文化や価値観を理解し外国人患者に対応できる看護職の育成を目標の1つに挙げています。そこで今回「当院の医療通訳としての実践」と題し、2019年度より当院で医療通訳として活躍されている台湾出身の医療支援課林羿汎さんに講演いただきました。本講演会は、会場とZoomによるハイブリッド形式で行い、会場16名、Zoom76名、総勢92名の多くの職種の方、医学生、看護学生の方にご参加いただきました。

講演では、医療通訳の業務内容、通訳実績、異文化対応、患者対応で意識していること、看護師経験を踏まえ医療通訳として感じること、部署との連携についてお話しいただきました。講演後、参加者から「自分の当た

り前は人の当たり前ではないことは日本人同士にも通じる」、「これまで国際的な視点から医療に触れる機会がなくとても興味深かった」など多くのご感想、また続編を期待するご意見もいただいております。異文化対応、国

際化発展への関うかでを をとときました。 をがいれてでないるです。 ではしたのででない。 をはいるであるでは、たりははしたのでででででです。 ではいたである。 を変りは、たりはできる。 を変りは、たります。 では、たります。 では、たります。



林さんによる 「当院の医療通訳としての実践」 の講演の様子

旭川がんリハビリテーション研修会の 取り組みについて リハビリテーション部 村田 絵吏

はじめに、がんのリハビリテーション(以下、リハビリ)について聞きなれない方も多いと思いますので、簡単に説明します。2006年にがん対策基本法が制定され、2016年に成立した改正法では、「がん患者の状況に応じた良質なリハビリの提供の確保」が組み込まれました。あらゆる状況のがん患者さんに対し、身体機能だけではなく生活の質(QOL)の向上のためのリハビリの必要性が求められるようになりました。同時に、がん患者リハビリ料算定に関する施設基準の一つに、各施設内の医師、看護師、リハビリセラピストがチームとなり、がんのリハビリ研修会(財団法人ライフプランニング・センター主催)に参加することが義務付けられました。

2017年に当院リハビリ部を事務局として、道北・道 東地域では初めてとなる、がんのリハビリ研修会実行 委員会を設立いたしました。私は事務局スタッフとし て関わらせていただいています。この実行委員会は医 療従事者や地域住民に対するがんリハビリの教育、啓 蒙を目的として活動しており、メンバーは当院の事務 局スタッフ以外に、市内の医師、看護師、理学療法士、 作業療法士、言語聴覚士が中心となり、毎年がんのリ ハビリ研修会を開催しています。今回は私たちの活動 をご紹介させていただきます。 旭川がんのリハビリ研修会には、毎回道内各地から約100名が参加されています。がん医療において道北・道東地域で活躍する医師・リハビリセラピストが講師・グループワークでのファシリテーターを務め、参加者にとって有意義な研修会となるように努めています。また本研修会の他に、今年の6月には「がんサバイバーの視点からリハビリテーションを考える」というタイトルで患者さんやその家族、医療関係者、地域住民を対象としたスキルアップ研修を開催しました。がんサバイバーの方を講師として、入院から退院、就職時の苦労や普段の生活の楽しみ方などを話していただきました。

今年度はもう一つ、「こどもホスピス」についての 講演を企画しています。ご興味のある方はぜひご参加 いただければと思います。

毎日、私たちは多くのがん患者さん・その家族と関わっています。一人一人ががんと共に生活を送る中で、その最期の時まで"その人らしい"人生を過ごせるよう、質の高いがんリハビリ医療の提供を目指していきたいと思います。その土壌作りとして、本研修会活動の幅をより一層拡げていきたいと思いますので、今後ともご指導、ご協力の程よろしくお願い申し上げます。



2020年度 旭川がんリハビリ研修会スタッフ

FRESH VOICE

助産師1年目として日々感じること 看護部 助産師 鳥井 紅里

助産師として旭川医科大学病院で勤務して7ヶ月が経過し、日々の業務にも少しずつ慣れてきました。 私の所属する産科病棟は、妊産褥婦や新生児を対象としており、一般的な経過をたどるローリスクな方だけでなく管理入院が必要なハイリスクな方まで幅広く対象としていることが特徴です。妊娠期・分娩期・産褥期、新生児期を通して、命の尊さや命を繋いでいくための専門職としての存在意義を日々感じています。

分娩介助の例数は少しずつ増えてきましたが、安全で母子にとって良い体験となるためには自分のケアや考えることに難しさを感じています。分娩進行は人によって違い、自分がその場の状況に置いて行かれないように常に気を張り、より良いケアはなにか考えなければならないことだらけです。そんな中、つらい痛みに耐える産婦さんの腰をさすりながら声をかけ続けたところ、「そばに付いていてくれていなかったら、心が折れていたと思う」と言われたときにやっとほっとし、自分の関わり方に少し自信が付きました。常に患者さんの声に耳を傾けなが

ら関わることがその人の力を引き 出すために大切なことだと実感し ました。分娩だけでなく産前・産



後の支援も行っていますが、退院後に母と子の力で 生活を営んでいくために、退院後に困ることはない か、育児を続けていけそうかと考えていくことにも 難しさを感じます。学生の頃、机上で産前から産後 の生活を考えていくと学んでいましたが、実際に関 わることでその重要性を実感しています。また、死 産や中絶、疾患を持って生まれた赤ちゃんと母に関 わる経験も少しずつ増えてきており、母子関係のた めにより良いケアや接する姿勢、自分自身の感情と の向き合い方に葛藤を感じるという経験が、自分に とっての糧になると思いました。

プリセプターを始め先輩方からの手厚い指導のお陰もあり、少しずつ一人で実施する機会が増え、自分一人としての責任感がより一層高まります。できることが増えてきた中でも自分の知識や技術を過信しすぎず、常に自分の行動を振り返りながら励んできたいと思っています。

FRESH VOICE

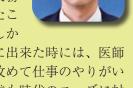
<u> 診療情報管理士として私が目指すこと</u> 経営企画課診療情報管理係 佐藤 基暉

今年度の4月に経営企画課診療情報管理係に入職してから10か月が経とうとしています。学生時代に診療情報管理士について学び、ある程度の知識を習得していたつもりでしたが、業務に必要な知識は全く別物で毎日学ぶことが多い現状です。入職1年目ですが様々な業務に携わることができ、多くの経験をさせて頂いていますが、分からないことや壁にぶち当たることが何度もありました。しかし、上司や先輩方によるサポートのおかげで何とか業務ができているのだと実感します。

私が主に担当している業務ですが、退院時要約のチェックや、未作成の督促と作成率の伝達、がん登録を行っています。また、担当する業務のひとつに電子文書の台紙作成・修正があり、医師などからの依頼により、退院時要約や手術記録における電子文書の新規作成や既存文書の修正があります。

新規に文書を作成する際は、日付の欄なのか、文字を書く欄なのか、どのくらいの文字数が必要な欄なのかなど、入念な打ち合わせが必要なのですが、

最初はそれが分からず様々な業務 を容易に考え注意をされていたこ とを今でも思い浮かべます。しか



し、電子文書がイメージ通りに出来た時には、医師などから感謝の言葉を頂き、改めて仕事のやりがいを感じ、また、電子文書の作成も時代のニーズに対応した重要な業務のひとつなのだと感じました。

様々なデータを活用し利用するこの時代、Access やFile Makerの習得も必要だと感じていますし、そもそもデータをいかに活用していくかも勉強しなければなりません。私自身先を見据えた仕事が出来るよう、より一層努力しなければなりません。

旭川医科大学の職員となり、間もなく2年目を迎えますが、まだまだ未熟で至らないところが多いと自覚していますが、私も日々の業務から多くの知識や技術を習得し、諸先輩方のような職員となれるよう、また将来私が後輩に指導できる職員となれるよう、業務に励みたいと考えております。

薬剤部 新薬紹介(81)アナモレリン塩酸塩(エドルミズ®

アナモレリン塩酸塩(商品名:エドルミズ®錠、以下本 剤)は2021年4月に発売された、がん悪液質に対する適 応を持つ日本初の薬剤である。規格は50mg錠が承認さ れており、当院では2021年8月より通常採用となっている。

がん悪液質とは、がん患者において、通常の栄養サ ポートでは完全に回復しない持続的な体重(特に筋肉 量)減少を特徴とする複合的な代謝異常であり、がん 薬物療法への忍容性の低下やQOLの低下などを生じ させ、予後にも悪影響を与えるとされている。

アナモレリンは、グレリン受容体を作動させ、成長ホ ルモンの分泌を促進するとともに食欲を亢進することで、 筋肉量および体重の増加作用を示すと考えられる。

用法・用量は、通常、成人には1日1回100mgを空 腹時に経口投与する。食事により吸収が著しく低下す るため、その影響を避けるため、いわゆる食間や就寝 前よりも、起床時に服用し、その後1時間は食事をし ないよう指導することが望ましい。

注意点として、うっ血性心不全、心筋梗塞または狭 心症、高度の刺激伝導系障害(完全房室ブロック等)、 中等度以上の肝機能障害のある患者や、消化管閉塞等 の消化管の器質的異常により食事の経口摂取が困難な 患者への投与は禁忌となっている。また、ボリコナゾ ール等CYP3A4を強く阻害する薬剤とは併用禁忌で ある。重大な副作用として、刺激伝導系抑制、高血糖、 糖尿病の悪化、肝機能障害があげられる。

適応患者の選択にあたっては、特定の悪性腫瘍(切除 不能な進行・再発の非小細胞肺癌、胃癌、膵癌、大腸 癌)のがん悪液質患者であること、栄養療法等で効果不 十分であること、食事の経口摂取が困難または食事の消 化吸収不良の患者には使用しないこと等の条件がある。 投与開始後3週間で効果が認められない場合は原則中 止すること、効果が認められた場合でも定期的に投与継 続の必要性を検討することが求められている。

(薬品情報室 八倉巻 真衣)

11月11日は

臨床検査の日

11月11日は臨床検査の日 臨床検査・輸血部発

いつも臨床検査・輸血部の活動にご協力いただきあ りがとうございます。

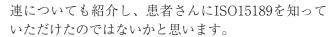
「臨床検査の日」は、臨床検査が病気の早期発見や 早期治療につながる有用なものであることを広く知っ ていただくために制定されました。臨床検査で不可 欠な+(プラス)、-(マイナス)にちなんで十一月 十一日が臨床検査の日に設定されました。

臨床検査・輸血部は、毎年の「臨床検査の日」に合 わせて企画を行っております。今年は10月28日~11月25 日の期間、正面玄関ホールに患者さんへ向けたポスター の掲示、デジタルサイネージの掲載を実施しました。内 容は、臨床検査と各検査室について、また検査室以外で の臨床検査技師の活動について記載しました。臨床検 査・輸血部では多岐にわたる検査を行っていますが、ど こでどのような検査をしているのか、検査室マップを作 成して紹介しました。また、当院における検査室以外で の臨床検査技師の活動に関しては、糖尿病教室、栄養

サポートチーム、感染制御部、排 尿機能検査について紹介しました。

そして、昨年度認定を取得し たISO15189 (国際的な検査能力・ 品質の保証する証) について紹 介しました。ISO15189は患者さ んにとってあまり聞き馴染みが なく、ご存じない方もいらっしゃ ると思います。この機会に少しで も興味を持っていただけたらと考

え、簡単ではありますがポスターに取 り上げました。また、近年の世界的な 流行に伴い臨床検査技師がPCR検査を 行っている新型コロナウイルスとの関



私たち、臨床検査技師の業務は、現代の医療におい てなくてはならない検査業務ですが患者さんと接する機 会が多くないことから、他の医療職と比較して知名度 の低い職種です。しかし、新型コロナウイルスの流行、 PCR検査に関わる話題でメディアに取り上げられる機会 もあり、これまでより臨床検査技師の名を知っていただ けるようになってきたことを実感しています。それでも、 依然として知名度は低いため今後も「検査の日」のよう な機会を通じて、臨床検査について興味を持ってもらえ るようにもっと多くの活動をしていけたらと思います。

(臨床検査・輸血部 菊池 彩翔)







患者さん向けポスター

永年勤続者表彰

勤労感謝の日にあわせ、11月22日(月)午前10時00分より、令和3年度本学永年勤続者表彰式が第一会議室で行われました。

表彰式は役員及び所属長の列席のもとに、学長職務代理から被表彰者に対し表彰状の授与 並びに記念品の贈呈が行われました。

次いで、学長職務代理から永年にわたり本学の発展・充実に尽力されたことに対する感謝 とねぎらいの挨拶がございました。

なお、被表彰者は次の方々です。(敬称略)

吉	田	成	孝	(解剖学講座 機能形態学分野	教授)
船	越		洋	(先端医科学講座	教授)
富	田	直	樹	(事務局人事課労務管理係	係長)
山	田	耕	平	(事務局入試課入学試験係	係長)
三	島	玲	子	(7階東ナース・ステーション	看護師長)
平	塚	志	保	(看護部 (倫理研究担当)	看護師長)
平	間	幸	子	(外来ナース・ステーション	副看護師長)
片	山	恵	理	(救命救急ナース・ステーション	助産師)

2021年度 患者数等統計

(経営企画課)

区分	外来患者 延 数	一日平均外来患者数	院 外 処方箋 発行率	初 診 患者数	紹介率	入院患者 延 数	-日平均 入 院 患 者 数	稼働率	前年度 稼働率	平均在院 日 数 (一般病床)
	人	人	%	人	%	人	人	%	%	日
7月	30,709	1,535.5	97.1	1,010	97.5	14,072	453.9	75.4	83.6	11.6
8月	32,194	1,533.0	97.1	1,242	81.5	14,241	459.4	76.3	81.7	11.2
9月	31,107	1,555.4	97.1	957	97.5	14,198	473.3	78.6	83.3	11.5
計	94,010	1,541.1	97.1	3,209	91.3	42,511	462.1	76.8	82.8	11.4
累計	185,624	1,521.5	97.1	6,326	94.7	83,381	455.6	75.7	81.6	11.3

時事二三三二

- ■12月6日(月)~17日(金)職員定期健康診断※±日除く
- ■12月16日(木)~27日(月)病院正面玄関ロータリー

イルミネーション点灯

■ 1月28日(金)精神科病院実地指導



新年あけましておめでとうございます。昨年は新型コロナウイルス感染症の影響で、会合や会食が減りこれまでの生活が一変した年でしたが、皆さまお変わりなくすごされましたか?体調面や精神面への影響はいかがでしたでしょうか。

私事ですが、年齢とともに体力が低下したことを感じるようになりました。2年前の年明け早々に路面の氷に足を取られ転倒し腰を強打したことがあり、その年は歩行困難の状態がしばらく続きました。腰や左脚の腫れや痛みは今まで経験したことがないほどの症状となったため、一時は精神的にかなり落ち込みました。昨年は普段どおり歩けるようになりましたが、ほんの一瞬の転倒により普通の生活が一変した辛さを経験したことで、今まで無意識にできていたことができなくなる喪失感は計り知れないものであることに気がつきました。それは、事故や病気によって通常の生活を送ることが困難となった患者さん達の気持ちも同様と思います。その気持ちに寄り添って仕事をしていきたいと思っています。

まだまだ冬の寒い時期が続き、感染症にも注意が必要です。病院職員の皆さんが、怪我なく健康で過ごせる1年となります様、祈念したいと思います。 (薬剤部 小枝 正吉)